5.13［水］

第548回 定期演奏会
サントリーホール／19時開演

The 548th Subscription Concert
Wednesday, 13th May, 19:00 / Suntory Hall

指揮／エイヴィン・グルベルグ・イェンセン
Conductor　EIVIND GULLBERG JENSEN P.6

ピアノ／アンドレアス・シュタイアー Piano　ANDREAS STAIER P.9

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster　KOTA NAGAHARA

モーツァルト **ピアノ協奏曲 第17番** ト長調 K.453 ［約30分］ P.11
MOZART / Piano Concerto No. 17 in G major, K. 453
Ⅰ. Allegro
Ⅱ. Andante
Ⅲ. Allegretto – Presto

［休憩　Intermission］

ショスタコーヴィチ **交響曲 第7番** ハ長調 作品60
〈レニングラード〉 ［約69分］ P.13
SHOSTAKOVICH / Symphony No. 7 in C major, op. 60 “Leningrad”
Ⅰ. Allegretto
Ⅱ. Moderato (poco allegretto)
Ⅲ. Adagio
Ⅳ. Allegro non troppo

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［助成］文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
［協力］**アフラック**（アメリカンファミリー生命保険会社）

5.17［日］

第177回 東京芸術劇場マチネーシリーズ
東京芸術劇場／14時開演

The 177th Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series
Sunday, 17th May, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／エイヴィン・グルベルグ・イェンセン
Conductor　EIVIND GULLBERG JENSEN P.6

クラリネット／金子 平（読響首席） Clarinet　TAIRA KANEKO (YNSO Principal) P.9

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster　KOTA NAGAHARA

グリーグ **〈ペール・ギュント〉第1組曲** ［約15分］ P.15
GRIEG / Peer Gynt Suite No. 1
Ⅰ. 朝
Ⅱ. オーセの死
Ⅲ. アニトラの踊り
Ⅳ. 山の魔王の宮殿にて

ニールセン **クラリネット協奏曲** 作品57 ［約24分］ P.16
NIELSEN / Clarinet Concerto op. 57

［休憩　Intermission］

ブラームス **交響曲 第2番** ニ長調 作品73 ［約40分］ P.17
BRAHMS / Symphony No. 2 in D major, op. 73
Ⅰ. Allegro non troppo
Ⅱ. Adagio non troppo
Ⅲ. Allegretto grazioso (Quasi Andantino)
Ⅳ. Allegro con spirito

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［助成］文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
［事業提携］東京芸術劇場

5.22［金］

第582回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール／19時開演

The 582nd Suntory Hall Popular Series
Friday, 22nd May, 19:00 / Suntory Hall

指揮・トロンボーン／クリスチャン・リンドバーグ
Conductor and Trombone　CHRISTIAN LINDBERG P.7

トロンボーン／桒田 晃（読響首席）Trombone　AKIRA KUWATA (YNSO Principal) P.10

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster　KOTA NAGAHARA

ステーンハンマル **序曲〈エクセルシオール！〉** 作品13［約13分］ P.18
STENHAMMAR / Concert Overture "Excelsior!", op. 13

サンドストレーム **永遠のエコー（2本のトロンボーンと管弦楽）**（日本初演）［約24分］ P.19
SANDSTRÖM / Echoes of Eternity for two Trombones and orchestra (Japan premiere)

［休憩　Intermission］

ベートーヴェン **交響曲 第7番** イ長調 作品92［約36分］ P.20
BEETHOVEN / Symphony No. 7 in A major, op. 92
Ⅰ. Poco sostenuto – Vivace
Ⅱ. Allegretto
Ⅲ. Presto
Ⅳ. Allegro con brio

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［助成］文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）

5.29［金］

第16回 読響メトロポリタン・シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール／19時開演

The 16th Yomikyo Metropolitan Series
Friday, 29th May, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

30［土］

第80回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール／14時開演

The 80th Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series
Saturday, 30th May, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮／ユーリ・テミルカーノフ Conductor　YURI TEMIRKANOV P.8

ピアノ／河村尚子 Piano　HISAKO KAWAMURA P.10

コンサートマスター／日下紗矢子 Concertmaster　SAYAKO KUSAKA

リムスキー＝コルサコフ **交響組曲〈シェエラザード〉** 作品35［約42分］ P.21
RIMSKY-KORSAKOV / Shéhérazade, op. 35
Ⅰ. 海とシンドバッドの船
Ⅱ. カランダール王子の物語
Ⅲ. 若い王子と王女
Ⅳ. バグダッドの祭り、海、船は青銅の騎士のある岩で難破

［休憩　Intermission］

ラヴェル **左手のためのピアノ協奏曲** ニ長調［約19分］ P.23
RAVEL / Piano Concerto in D major for the Left Hand

ラヴェル **バレエ音楽〈ダフニスとクロエ〉第2組曲**［約18分］ P.24
RAVEL / Daphnis et Chloé Suite No. 2
Ⅰ. 夜明け – Ⅱ. パントマイム – Ⅲ. 全員の踊り

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［助成］文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
［事業提携］東京芸術劇場（5/29）
［協力］横浜みなとみらいホール（5/30）

エイヴィン・グルベルグ・イェンセン

Eivind Gullberg Jensen

オペラ・コンサートの両輪で活躍するノルウェーの新星 期待高まる読響デビュー

©Mat Hennek

1972年ノルウェー生まれ。トロンハイムでヴァイオリンと音楽理論を学んだ後、ストックホルムでヨルマ・パヌラ、ウィーンでレオポルト・ハーガーという2人の名伯楽の薫陶を受けた。

2009年から独・ハノーファーのNDR（北ドイツ放送）フィルの首席指揮者を務め、14年までの任期中に〈ワルキューレ〉〈神々の黄昏〉〈さまよえるオランダ人〉などの演奏会形式上演に取り組んだ。ハノーファーのマッシュ公園で行われた〈トスカ〉の野外公演では、1万3000人もの観客を集め、その模様がテレビで放送され、注目をあびた。

客演指揮者としてはベルリン・フィル（ヴァイオリニストのワディム・レーピンとの共演）、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、オランダ放送フィル、パリ管、フランス国立管、オスロ・フィル、ストックホルム・フィルなどと共演している。

オペラではイングリッシュ・ナショナル・オペラ〈イェヌーファ〉、リヨン歌劇場〈外套／ジャミレー〉、チューリヒ歌劇場〈海賊〉〈ルサルカ〉、バイエルン国立歌劇場〈フィデリオ〉、ローマ歌劇場〈ルサルカ〉などを指揮して好評を博している。本年11月に〈トスカ〉で新国立劇場へ、そして17年にはウィーン国立歌劇場へのデビューが予定されている。

12年に札幌のPMF音楽祭への出演で初来日。読響とは今回が初共演となる。

◇5月13日 定期演奏会
◇5月17日 東京芸術劇場マチネーシリーズ

クリスチャン・リンドバーグ

Christian Lindberg

近年、指揮者としても世界中で注目される天才的トロンボーン奏者

©Mats Backer

1958年スウェーデン生まれ。17歳でトロンボーンを始め、その2年後にはストックホルム王立音楽大学への入学と同時にストックホルム王立歌劇場管の団員となる天才ぶりを発揮。その後、英国王立音楽大学へ留学し、数々のコンクールでの優勝を経て、世界中でトップ・ソリストとして活躍。これまでにベリオ、クセナキス、武満徹、タネジといった現代の大作曲家たちから80を超える作品を献呈されている。英国王立音楽大学ではプリンス・コンソート名誉教授の称号を付与され、2005年にはスウェーデン国王より栄誉ある“Litteris et Artibus”勲章を授与された。スペインのヴァレンシアでは本人の名を冠したクリスチャン・リンドバーグ国際トロンボーン・コンクールが開催されている。

熱心な誘いを受けて2000年にノーザン・シンフォニアへ初めて指揮者として登場し、大絶賛を博した。その後ほどなくしてスウェーデン・ウィンド・アンサンブルとノルディック室内管弦楽団、ノルウェー・アークティック・フィルハーモニーの首席指揮者に就任。これらの楽団とツアーやレコーディングに積極的に取り組みつつ、フィレンツェ五月祭管、ロッテルダム・フィル、スウェーデン放送響、ヘルシンキ・フィルなどへ客演し、指揮者としても高い評価を得ている。また、近年は作曲家としても才能を発揮し、シカゴ響などでその作品が演奏されている。

読響とは08年にソリストとして共演、指揮者としては今回が初共演となる。

◇5月22日 サントリーホール名曲シリーズ

ユーリ・テミルカーノフ

Yuri Temirkanov

深遠なる世界観を描き出し 圧倒的な人気を誇る ロシアを代表する巨匠

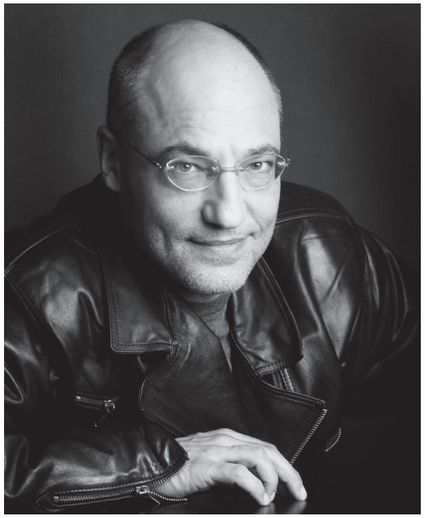
©読響

1938年旧ソ連コーカサス地方のナルチク生まれ。9歳から音楽を学び始め、13歳でレニングラード（現サンクトペテルブルク）音楽院に入学。卒業後の66年に全ソ連指揮者コンクールで優勝したことをきっかけにレニングラード・フィルでムラヴィンスキーのアシスタントとなり、指揮者として歩み始めた。その後、レニングラード響の首席指揮者（68〜76年）、キーロフ劇場（現マリインスキー劇場）の音楽監督（76〜88年）などを歴任。88年からはサンクトペテルブルク・フィル（旧レニングラード・フィル）の音楽監督の地位にあり、ロシア音楽界の頂点に君臨し続けている。

ロシア以外では、ロンドンのロイヤル・フィル（首席指揮者、92〜98年）、ドレスデン・フィル（首席客演指揮者、92〜97年）、デンマーク国立放送響（首席客演指揮者、98〜2008年）、ボルティモア響（音楽監督、00〜06年）などで要職を務めたほか、客演指揮者としてウィーン・フィル、ベルリン・フィル、シュターツカペレ・ドレスデン、ロンドン響、ロンドン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ニューヨーク・フィル、フィラデルフィア管、ボストン響、シカゴ響、クリーヴランド管、ロサンゼルス・フィル、ローマ・サンタチェチーリア管などと共演を重ねている。

読響には2000年に初登場。楽団員と聴衆双方から圧倒的な支持を集め、その後04年、07年、10年、13年と共演を続け、ロシア音楽を中心としたレパートリーで名演奏を成し遂げてきた。今回が6回目の共演となる。

◇5月29日 読響メトロポリタン・シリーズ
◇5月30日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ



©Eric Manas

ピアノ アンドレアス・シュタイアー

Piano Andreas Staier

世界で最も注目されているフォルテピアノ／チェンバロ奏者。独・ゲッティンゲンに生まれ、ハノーファーとアムステルダムでピアノとチェンバロを学ぶ。ムジカ・アンティクワ・ケルンのチェンバロ奏者としてキャリアをスタートさせ、現在はソリストとして主要音楽ホールでのリサイタルや古楽オーケストラとの共演を中心に活躍している。バッハやベートーヴェンの録音は多くの賞を獲得しており、最近では〈ゴルトベルク変奏曲〉〈ディアベリ変奏曲〉などの名盤を生み話題となった。読響とは今回が初共演。モダン・ピアノを用いてモーツァルトを奏でる。

◇5月13日 定期演奏会

©読響

クラリネット 金子 平（読響首席）

Clarinet Taira Kaneko（YNSO Principal）

東京藝術大学を経て独・リューベック国立音楽大学で学び、2010年に卒業。クラリネットを半田裕一、山本正治、村井祐児、ザビーネ・マイヤーの各氏に師事した。06年日本音楽コンクール第1位、併せてE.ナカミチ賞、岩谷賞（聴衆賞）を受賞。08年ヴィースバーデン・モーツァルト・コンクール第1位。同年ミュンヘン国際音楽コンクール第3位（2位なし）。09年ルイ・シュポア・メダルなど受賞多数。09年から12年までリューベック歌劇場管クラリネット奏者。13年1月読響に入団、首席クラリネット奏者を務めている。

◇5月17日 東京芸術劇場マチネーシリーズ

©読響

トロンボーン 桒田 晃（読響首席）

Trombone Akira Kuwata（YNSO Principal）

武蔵野音楽大学卒業。在学中に新日本フィルに入団。トロンボーンを山下晴生、真弓基教、神谷敏の各氏に師事した。1991年日本管打楽器コンクール第2位。97年大阪トロンボーンコンペティションソロ部門第2位（1位なし）。97年2月読響に入団、首席トロンボーン奏者を務めている。トロンボーンクァルテット・ジパング、ブラス・ジャパン、カスタムブラスクインテット、アンサンブル・ターブのメンバーとしても活動している。武蔵野音楽大学、桐朋学園大学の非常勤講師。2006年にソロCD「COLORS」をリリースした。

◇5月22日 サントリーホール名曲シリーズ

©Hirofumi Isaka

ピアノ 河村尚子

Piano Hisako Kawamura

ハノーファー国立音楽芸術大学在学中にミュンヘン国際コンクールで第2位、クララ・ハスキル国際コンクールに優勝。以後ドイツを拠点に活動し、ウィーン響、チューリヒ・トーンハレ管、サンクトペテルブルク・フィルなどと共演した。ベルリン放送響、チェコ・フィルなどの来日公演に出演。新日鉄音楽賞、出光音楽賞、日本ショパン協会賞、井植文化賞、文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞、ホテルオークラ音楽賞を受賞。読響とは2009年に初共演、13年にはテミルカーノフの指揮でラフマニノフ／ピアノ協奏曲第2番を披露し、絶賛をあびた。

◇5月29日 読響メトロポリタン・シリーズ
◇5月30日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

5.13［水］

片桐卓也（かたぎり たくや）・音楽ライター

モーツァルト ピアノ協奏曲 第17番 ト長調 K.453

作曲：1784年4月12日完成／初演：1784年6月／演奏時間：約30分

ウィーン時代の活発な活動を象徴する傑作

鍵盤楽器がソロを担当する協奏曲はバロック時代の終わり頃から盛んに作曲されるようになった。その流れをうけてヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）も数多くのピアノ協奏曲を書いた。モーツァルトの時代には現在のピアノにつながるフォルテピアノが製作され始めており、モーツァルトはそのフォルテピアノを自分で弾きながら演奏するというスタイルで作品を発表した。

ザルツブルクの宮廷での仕事に飽き足らず、モーツァルトはミュンヘンの宮廷のために歌劇〈イドメネオ〉を作曲し、上演する仕事で長くミュンヘンに滞在していた。それを快く思わなかったザルツブルク大司教は、ウィーン滞在中にモーツァルトを呼びつける。しぶしぶウィーンにたどり着いたモーツァルトは大司教と決裂して、お雇い音楽家ではなく、自由な作曲家として自立を目指す。1781年、モーツァルトは25歳だった。

モーツァルトはまず貴族の子女のピアノ教師としてウィーンでの活動を始める。そしてその弟子たちを念頭に、同時に自分自身が演奏会で弾くために、数多くのピアノ協奏曲を書き始める。ウィーンでは1782年9月にピアノ協奏曲第12番（K.414）をまず作曲。翌年の第13番（K.415）は皇帝も臨席した演奏会で初演され、好評だった。ウィーンでの自分の人気を確立しようと、モーツァルトは自作の協奏曲を自分で初演するという予約演奏会を企画する。1784年の3月に行われたその

予約演奏会でピアノ協奏曲第14番（K.449）が演奏された。この時期からモーツァルトは自作を目録に記録し始める。その記念すべき第1作目が第14番のピアノ協奏曲だった。この曲は当時モーツァルトのピアノの弟子であったバルバラ・プロイヤー（1765～1811）のために書かれたものだった。そして1784年前半に第17番までのピアノ協奏曲が次々と誕生する。さらに、この年には第18、19番のピアノ協奏曲が書かれ、初演された。6曲もの傑作が1784年に一気に生まれたわけだ。

第17番のピアノ協奏曲は、第14番と同じようにバルバラ・プロイヤーのために書いた作品だった。そのせいでこの曲を「プロイヤー協奏曲（第2）」と呼ぶこともある。自作目録では第5番目の作品となる。モーツァルトがザルツブルクの父へ宛てた手紙によると、この曲はプロイヤー邸でバルバラによって演奏されたようだが、それ以前にモーツァルト自身が初演した可能性もあると言われている。全体は3楽章。管楽器なしで演奏できるように書かれた第14番と比較すると、第17番はフルート、オーボエ、ファゴット、ホルンが加わり、管楽器の役割が大きい。

第１楽章はアレグロ、4分の4拍子、ソナタ形式。オーケストラが明るいテーマを演奏するが、そこでも弦楽器と管楽器が見事に融合しているのを感じることができる。ピアノが登場すると、その華やかな主題を引き継ぎながら、流れるように歌っていく。転調も多く、少し翳（かげ）りのある部分も多い。その変化が見事な楽章だ。

第２楽章はアンダンテ、4分の3拍子、ハ長調。モーツァルト自身のピアノ協奏曲第21番の第2楽章にも通じるような叙情性があり、また絶えず変化してゆく音楽の表情によってスケールの大きな緩徐楽章となっている。

第３楽章はアレグレット～プレスト、2分の2拍子、変奏曲形式。この楽章の主題に関しては有名なエピソードがある。街で見つけたムクドリがこの主題をほぼ正確に歌ったので、モーツァルトはそのムクドリを飼って「シュタール」という名前を付けたというもの。真偽のほどは分からないが、シュタールが歌ったというメロディをモーツァルトは金銭出納帳に書き込んでいる。その主題を変奏し、最後には華やかでテンポの速いコーダで終わる。

ちなみに本日の演奏者アンドレアス・シュタイアーはチェンバロ、フォルテピアノの名手として知られるが、今回は現代のピアノを使って演奏する。

楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独奏ピアノ

ショスタコーヴィチ

交響曲 第7番 ハ長調 作品60 〈レニングラード〉

作曲：1941年7～12月／初演：1942年3月5日、クイビシェフ／演奏時間：約69分

歴史的な出来事を独自の手法で描いた大作

ソ連時代に活躍したロシアの作曲家ドミートリイ・ショスタコーヴィチ（1906～75）の人生は、大きな激動の時期と重なっている。彼の生まれる前年にロシアは1905年の革命を経験していた。サンクトペテルブルク（後にペトログラード、レニングラードと改称される）に生まれたショスタコーヴィチは、その後1917年に2月革命、10月革命を経験し、1918年にペトログラード音楽院に入学した。

そして、音楽家として活発に活動していた1941年にはナチス・ドイツの侵攻による大祖国戦争（独ソ戦）が始まる。まさにその大祖国戦争が始まった時期に書かれた交響曲が、この第7番である。首都もモスクワから一時的にヴォルガ川沿いのクイビシェフ（現・サマーラ）に移され、政府機関が移動。また芸術家の多くもそこへ移った。そんな時期に、包囲されつつあるレニングラードに留まり、ショスタコーヴィチは作曲を続け、その後クイビシェフに移ってこの交響曲を完成させた。その際にショスタコーヴィチは「この交響曲はファシズムとの戦い（中略）、そして我が故郷レニングラードに捧げる」と述べたところから、サブタイトルの「レニングラード」が付けられた。

全体は4楽章から構成され、ショスタコーヴィチの交響曲のなかでは演奏時間が最も長い大作となっている。海外での初演の動きも早く、1942年6月にはロンドンで、同年の7月にはアメリカで初演が行われた。アメリカ初演はトスカニーニがNBC交響楽団を指揮して行われ、この演奏はラジオ放送された。またレニングラードでの初演は1942年8月9日に行われたが、この日はロシア軍が大規模な軍事作戦を展開して、ドイツ軍の攻撃をいったん停止させたという。

この交響曲でよく話題となるのが、第1楽章の「戦争の主題」の部分。形式的には展開部にあたる箇所で、その「戦争の主題」が12回繰り返されるのだが、小太鼓のリズムに乗った変奏はラヴェルの〈ボレロ〉のアイディアを取り入れたとも言われる。そして「戦争の主題」そのものも、ムソルグスキーの〈ボリス・ゴドゥノフ〉や自作のオペラ〈ムツェンスク郡のマクベス夫

人〉、レハールのオペレッタ〈メリー・ウィドウ〉からの引用とする説もあるが、確証はない。全体が4楽章からなるこの交響曲は、壮大な第1楽章、スケルツォ的な第2楽章、アダージョの第3楽章、勝利を描くダイナミックな第4楽章という交響曲の伝統的な形式に従った作品と言えるだろう。ただし、その各楽章の内容は伝統の枠に留まるものではない。

第1楽章はいちおうソナタ形式を取る。提示部では、まず力強い第1主題が人間の生命力を表すように登場する。その後、平和な生活を表す第2主題が登場し、美しい弦楽合奏、管楽合奏で描かれる。最後はピッコロと独奏ヴァイオリンによる静けさを感じさせる音楽となる。そこに小太鼓の音が遠くから響き、「戦争の主題」と呼ばれる音楽が登場する。展開部はこの主題を繰り返して、次第に盛り上がっていく。金管楽器による咆哮(ほうこう)の後で、次第に音楽は静まりファゴットのソロによる第2主題が登場し、静かな再現部となる。しかし、その中にも低弦のピッツィカートなど不安な音が聞こえてくる。コーダは弦楽合奏による静かな音楽だが、「戦争の主題」が顔を出している。

第2楽章はモデラート・ポーコ・アレグレットと表記されたスケルツォ。弦楽器を中心とした主題が登場し、オーボエによる哀愁を帯びた印象的なメロディが続く。その後は次第に激しい音楽となり、金管楽器によるクライマックスが築かれる。再び静かな音楽に戻り終わる。

第3楽章はアダージョ。冒頭部分はコラール風の主題が高らかに歌われる。その後、弦楽器による力強いメロディが登場する。中間部はかなり荒々しい雰囲気となり、管楽器、打楽器、弦楽器が交錯していく。最後は木管楽器の深い音色に包まれ、そのまま第4楽章へと繋がる。

第4楽章はアレグロ・ノン・トロッポ。全体は三つの部分からなる。第3楽章から続く序奏の部分には「タタタター」という速いリズムが登場するが、これはモールス信号の「V」、つまり「Victory」の「V」を表すとされる。第1部はそのリズムを執拗(しつよう)に使い、大きなクライマックスを作り出す。第2部はテンポの遅い、暗さを持った音楽が続く。そして第3部は、第2部のテンポのままに次第に盛り上がり、第1楽章の最初のテーマが再び壮大に展開されるなか、楽章冒頭のリズムも登場してダイナミックに終わる。

楽器編成／フルート3（ピッコロ、アルトフルート持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3（エスクラリネット持替）、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル、スネアドラム、タンブリン、タムタム、シロフォン）、ハープ2、ピアノ、バンダ（ホルン4、トランペット3、トロンボーン3）、弦五部

5.17［日］

飯尾洋一（いいお よういち）・音楽ライター

グリーグ〈ペール・ギュント〉第1組曲

作曲：1875年、1888年（組曲用編曲）／初演（全曲）：1876年2月24日、クリスチャニア（現オスロ）／演奏時間：約15分

文豪イプセンから依頼された劇音楽の傑作

1874年1月、ノルウェーを代表する作曲家エドヴァルド・グリーグ（1843～1907）は、同国の劇作家イプセンから戯曲『ペール・ギュント』のための劇音楽の作曲を依頼された。30歳の若きグリーグはこの作品にじっくりと取り組み、1875年9月にスコアを完成させた。翌年、戯曲の付随音楽として初演された後、グリーグは演奏会用に組曲第1番と第2番を編んでいる。

ほら吹きの夢想のような奇想天外で猥雑(わいざつ)なストーリーを綴(つづ)った台本には鋭い風刺性も感じられるが、音楽にはグリーグならではの率直さとみずみずしい叙情性があふれている。組曲の曲順はストーリーに添ったものではなく、音楽的な流れが優先されている。

第1曲“朝”　新たな冒険へと旅立つ主人公ペールが、モロッコの海岸で日の出を迎える。冒頭の爽快なフルートが朝の訪れをあらわし、やがてオーケストラ全体で朝日の輝きを表現する。

第2曲“オーセの死”　病の床にあった母オーセが、ペールが語る冒険談を聞きながら、静かに息を引きとる。ゆるやかな弦楽合奏による痛切な悲しみの音楽。

第3曲“アニトラの踊り”　砂漠のオアシスで、アラブの娘たちが踊る。美しい娘アニトラの踊りに、ペールはわれを忘れる。

第4曲“山の魔王の宮殿にて”　魔の山へと足を踏み入れたペールは、不気味なトロール（妖魔）たちに取り囲まれる。グロテスクな主題が最初はゆっくりと奏でられ、やがてテンポを速めて、荒々しさを増す。トロールたちは猛然とペールに襲いかかる。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル、大太鼓）、弦五部

ニールセン
クラリネット協奏曲 作品57

作曲：1928年／初演：1928年10月、コペンハーゲン／演奏時間：約24分

技巧的かつ叙情的な独奏の調べ

カール・ニールセン（1865〜1931）はデンマークが生んだ最大の作曲家といえるだろう。幼少時よりヴァイオリンを学び、作曲家としての活動と並行して、王立劇場管弦楽団の第2ヴァイオリン奏者を16年間にわたって務めた。

1922年にコペンハーゲン管楽五重奏団と親交を結んだことをきっかけとして、ニールセンは管楽器のための作品群に取り組む。まず管楽五重奏曲で大きな成功を収めると、続いてこの管楽五重奏団のメンバーひとりひとりに対して、協奏曲を書いて献呈するというアイディアを思いつく。フルート奏者のホルゲル・ギルベルト＝イェスペルセンのためにフルート協奏曲を完成させると、続いてクラリネット奏者のオーゲ・オクセンヴァドのためにこのクラリネット協奏曲を書きあげた。しかし、すでに晩年を迎えていたニールセンは、当初予定していた残りの3曲の協奏曲を書くことができずに世を去っている。

それまでにニールセンが書いたヴァイオリン協奏曲およびフルート協奏曲がいずれも2楽章構成の協奏曲だったのに対し、このクラリネット協奏曲は単一楽章で書かれている。全体を急―緩―急の三つの部分からなる古典的な構成と見ることもできるだろう。オーケストラの編成は簡潔で、使用される管楽器はファゴットとホルンのみ。打楽器は小太鼓だけが用いられ、くっきりとした明快な響きが生み出される。

冒頭部分はアレグレット・ウン・ポーコで開始される。乾いたユーモアを漂わせる前奏に続いて、独奏クラリネットが登場する。次々と表情を変えながら、やがてクラリネット独奏による技巧的なカデンツァに到達する。

緩徐楽章に相当する中間部のポーコ・アダージョは、叙情的で幻想味豊か。短いカデンツァ風のパッセージをはさんで、活気のあるアレグロ・ノン・トロッポへと突入する。軽快さとメランコリーを同居させながら、カデンツァを経て力強く高潮した後、静かに曲を閉じる。

楽器編成／ファゴット2、ホルン2、打楽器（小太鼓）、弦五部、独奏クラリネット

ブラームス
交響曲 第2番 ニ長調 作品73

作曲：1877年／初演：1877年12月30日、ウィーン／演奏時間：約40分

風光明媚（めいび）な景勝地で書かれた「田園交響曲」

あまりにも偉大なベートーヴェンの9曲の交響曲の後に、なにを書けばいいのか。先人への畏敬の念の強さから、ヨハネス・ブラームス（1833〜1897）は43歳で最初の交響曲を完成させるまでに、構想から約20年を要している。

しかし、「最初の交響曲を書く」という過大なプレッシャーから解放されたためか、2番目の交響曲は第1番完成の翌年である1877年のひと夏の間に一気に書きあげられた。この年、ブラームスはオーストリアのヴェルター湖畔の景勝地ペルチャハで夏を過ごした。アルプスの山並みを遠望する風光明媚（めいび）な小さな町をブラームスは大いに気に入り、以後3年間、ペルチャハは夏の仕事場となった。夏の陽に輝く青い湖と澄んだ空気は、作曲家のインスピレーションの源となったにちがいない。のびやかな楽想があふれ、牧歌的な雰囲気が横溢（おういつ）するこの作品は、ベートーヴェンの交響曲第6番〈田園〉にちなんで、しばしばブラームスの「田園交響曲」とたとえられる。

ブラームスはこの新作について、友人たちへの手紙で「耐えがたいほどメランコリックな作品」「スコアは死亡通知の黒枠付きで出版されなければならない」と悲劇的な楽想を予告していた。予告に反して実際の作品が雄大な自然賛歌ともいうべき輝かしい作品だったのは、ブラームスなりのユーモアだったのだろう。

第1楽章　アレグロ・ノン・トロッポ
低弦の短い動機に導かれて、牧歌的なホルンの主題で開始される。弱奏によるティンパニのトレモロにトロンボーンの厳かな響きが続くのは、遠雷の表現か。

第2楽章　アダージョ・ノン・トロッポ
ほのかに愁いを帯びたチェロの主題で開始される。

第3楽章　アレグレット・グラツィオーソ（クアジ・アンダンティーノ）　素朴なオーボエの主題で始まる主部と、リズミカルな二つの中間部が対比をなす。

第4楽章　アレグロ・コン・スピリト
歓喜を爆発させて壮麗な頂点を築く。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

5.22［金］

柴田克彦（しばた かつひこ）・音楽ライター

ステーンハンマル

序曲〈エクセルシオール！〉 作品13

作曲：1896年／初演：1896年12月28日、コペンハーゲン／演奏時間：約13分

ドイツ風ロマンと未来への覇気が漲（みなぎ）る

ヴィルヘルム・ステーンハンマル（1871～1927）は、近代のスウェーデンを代表する作曲家、ピアニスト、指揮者。ベルリンで学び、ドイツ・ロマン派の影響下で創作活動を始めた彼は、2曲の交響曲やカンタータ〈歌〉といった代表作で、民謡の引用を避けながらも北欧特有の色彩をもつ独自の作風を確立した。ストックホルム歌劇場やエーテボリ交響楽団等での指揮活動も含めて、多大な尊敬を集めた。

〈エクセルシオール！〉は、1896年に完成された初期の作品。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団に献呈され、同年12月、アルトゥール・ニキシュが指揮する同楽団によって、コペンハーゲンで初演された。タイトルは「高みに向かって」や「天の高みに昇らん」と訳されており、スコアには、「空の光に消えるヒバリ」「急上昇する鷲（わし）」等の語句を含む、ゲーテの『ファウスト』の一節が付されている。

曲は、かようなイメージを表現した演奏会用序曲。木管の3連音に乗った弦楽器の激しい主題に始まり、やがて木管による叙情味を帯びた主題が登場する。両主題が緊張感を保ちながら展開され、ヴァイオリン独奏を挟んで高揚と沈静を繰り返す。最後は金管を中心に力強く終結。

ドイツ音楽の影響が濃い時期に書かれた同曲は、メンデルスゾーン――他にワーグナー、ブラームス等も――を彷彿（ほうふつ）させる。そのため当初母国では評価されなかったが、明快なロマン性と若々しい覇気は充分に魅力的だ。ちなみに本日タクトをとるリンドバーグは、ロイヤル・フランダース・フィルを指揮して、CD（BIS）にも録音している。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

サンドストレーム

永遠のエコー（2本のトロンボーンと管弦楽）（日本初演）

作曲：2009年／初演：2009年11月27日、カセレス（スペイン）／演奏時間：約24分

2人の名手が冴えた響きを交わす新型協奏曲

ヤン・サンドストレーム（1954～）は、現代のスウェーデンを代表する作曲家の一人。ストックホルム王立音楽院で学び、4本のオペラや多数のオーケストラ曲、合唱曲など幅広い作品を発表している。中でも有名なのが、リンドバーグの協力で書かれた〈モーターバイク協奏曲〉（トロンボーン協奏曲第1番、1988～89）。オートバイのあらゆる音をトロンボーンで表現したこの曲で、世界に名を知らしめた。リンドバーグは、初期から活動を共にする盟友的存在で、他にもトロンボーン協奏曲第2番〈ドン・キホーテ〉（1994）や小品を彼のために作曲している。

〈永遠のエコー〉は、スペインのエストレマドゥーラ管弦楽団（の財団）の委嘱による作品。2009年3月に完成し、同年11月、中西部エストレマドゥーラ州のカセレスおよびバダホスにて、リンドバーグと彼の弟子で指揮者でもあるリカルド・カセロの独奏により初演された。

曲は、無調だが前衛的ではない、約24分ひと続きの二重協奏曲。トロンボーン同士や、ソロとオーケストラの掛け合い（エコー？）を中心に、変化に富んだ音楽が展開される。スコアには、第2ソリストが指揮者を兼ねるよう指示され、指揮する箇所、指揮者なしで演奏する箇所が細かく指定されている。なお、冒頭部分をはじめ若干の仕掛けもあるが、日本初演ゆえに虚心で臨むのが一番だろう（ただ、以下の概要には、一部触れておく）。

音楽は静かに始まり、変拍子が多用された激しい部分へ移る。弦のグリッサンドから遅い部分となり、2本のトロンボーンの掛け合い等が続いた後、さらに静かな部分へ。ここでリンドバーグの語り（大意は「私は叫び声とエコーを聞く。過ぎし時、来る時からの声……女の叫び、兵士の声、永遠の都市からの声。永遠のエコー。老いた兵士の語りを聞け」）が入る。次いで壮麗な部分、リズミカルな部分が現れ、サイレン音をまじえながら高揚。そして静寂の中に消えていく。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2（バスクラリネット持替）、ファゴット2（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（ウッドブロック、シンバル、タムタム、グロッケンシュピール、テンプル・ブロック、ヴィブラフォン、ウインドチャイム、チューブラベル、モンキーサウンド、サイレン、ログドラム）、ハープ、弦五部、独奏トロンボーン2

ベートーヴェン

交響曲第7番 イ長調 作品92

作曲：1811～13年／初演：1813年12月8日、ウィーン／演奏時間：約36分

リズムの乱舞に心も弾む、屈指の人気作品

古典派の巨匠ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が、中期の後半に作曲した人気交響曲。ワーグナーによる“舞踏の神化”の形容でも知られる。

1808年の交響曲第5番、第6番から約3年、健康面の不安や失恋が重なっていたベートーヴェンは、1811年夏、ボヘミアの温泉地で気力を回復し、1812年5月に第7番をほぼ完成。翌年初頭に修正後、1813年12月、ウィーン大学講堂における「戦争傷病兵のための慈善コンサート」で公開初演された。ナポレオン軍に対する戦勝ムードの中で行われた当公演は、〈戦争交響曲「ウェリントンの勝利」〉がメインを成すイベント的なコンサート。明快でビートの効いた第7番もタイムリーな音楽ゆえに、生涯屈指の大成功を収めた。

9曲の交響曲1曲ごとに新たな試みを行ったベートーヴェンがここで打ち出したのは、“リズムの徹底強調”。各楽章に設けられたリズム・パターンが生命力を生み出し、しかもカンタービレ（歌うこと）の共存が成されている。純粋な緩徐楽章を欠く点も、これと連動した大きな特徴。また、第5、6番の拡大路線から古典的な2管編成に戻り、第1楽章の序奏が復活した。これらは古い形態の中に新機軸を盛り込むための設定とみなされており、実際、旧来の編成で創出される迫力と高揚感は驚異的というほかない。

第1楽章　ポーコ・ソステヌート～ヴィヴァーチェ　長めの序奏に始まり、「ターンタタン」のリズムを軸に、熱狂的な盛り上がりをみせる。

第2楽章　アレグレット　「タータタ・ター」のリズム動機が支配する、哀愁を帯びた葬送行進曲風の音楽。「不滅のアレグレット」と呼ばれる名楽章。

第3楽章　プレスト　「タタタ・タタタ」の3連音が続くスケルツォに、民謡風のトリオ（中間部）が2回挟まれる。

第4楽章　アレグロ・コン・ブリオ　冒頭の「タンタタタン」のリズムを軸にした、推進力抜群のフィナーレ。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

5.29［金］　5.30［土］

相場ひろ（あいば ひろ）・音楽ライター

リムスキー＝コルサコフ

交響組曲〈シェエラザード〉 作品35

作曲：1888年2～7月／初演：1888年10月28日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約42分

『千夜一夜物語』の世界をスケール豊かに描く

『千夜一夜物語』は、古くは10世紀ペルシャの文献にその存在が記されている説話集で、現在に伝わるかたちにまとめられたのは15世紀頃ともいわれる。18世紀初頭にフランスのアントワーヌ・ガランによって翻訳・紹介されて以降、ヨーロッパでたいへんな人気を博したこの説話集に想を得て、ニコライ・リムスキー＝コルサコフ（1844～1908）は交響組曲〈シェエラザード〉を作曲した。楽譜の冒頭に彼は以下のように記している。

「すべての女は不実であると思い込んだシャリアール王は、自らがめとる女を皆初夜の後に殺すと誓った。しかし、王妃シェエラザードは千一夜にわたって数多くの物語を語り継ぐことで命を長らえた。物語の続きを聞きたい王は、妻の処刑を一日一日と延期し、ついに殺すことを諦めたのだ」

『千夜一夜物語』ですべての物語がシャリアール王とシェエラザードとの対話の中にはめ込まれているのと同様、〈シェエラザード〉では、冒頭で荒々しく奏されるシャリアール王の主題と、ヴァイオリン独奏にあらわれるシェエラザード妃の主題が全曲を通して随所に登場し、作品の枠組みを成す。もっとも、作曲者は自伝の中で「それぞれの主題は物語上の役割を担うようにみえても純粋に音楽的なものであって、交響曲としての展開の中に組み込まれている」と述べて、音楽の進行に何らかのストーリーが重ねられていることを否定している。彼は各楽章に内容を暗示する副題を添えることにも乗り気ではなかったという。

第1楽章“海とシンドバッドの船”

船乗りシンドバッドの語る七つの航海の物語は、説話集中でも最も有名である。ここではシャリアール王とシェエラザードの両主題に続いて、波のうね

りを暗示する音形があらわれ、シャリアール王の主題（同時に「海」の主題でもあるとされる）がそれに乗ってスケール豊かに歌われる。やがて木管楽器が東洋的な音形を奏するのを合図に、新たに優美な主題が導入される。それらと絡み合って活躍する独奏ヴァイオリンが印象的である。

第２楽章“カランダール王子の物語” カランダールとはイスラム教でいう托鉢（たくはつ）の行者で、ガラン版『千夜一夜物語』には「王の息子である３人のカランダールとバグダッドの５人の女の話」と題する章がある。ヴァイオリン独奏のカデンツァに続いて、特徴的なリズムを持つ主題がファゴットにあらわれ、さまざまな楽器に歌い継がれる。その後突如として鋭い金管の楽句が鳴り渡り、続く音楽はラプソディック（狂詩曲的）な展開を繰り広げる。

第３楽章“若い王子と王女” 若い恋人たちを表現するかのように、優美で叙情的な旋律と打楽器を伴った軽快な旋律とが、交互に歌われる。後半にはヴァイオリン独奏も加わってロマンチックな雰囲気を高める。

第４楽章“バグダッドの祭り、海、船は青銅の騎士のある岩で難破” 騎士像のある「磁石の島」で船が難破する話は、第2楽章で触れたカランダールの章中「第3のカランダールの話」にみられる。シャリアール王の主題とシェエラザードの主題が交互に奏された後、活気ある祭りのリズムとともに音楽が高揚していく。最高潮に達したところで第1楽章の「海」の主題が回帰し、打楽器を交えた最強奏が壮絶な船の難破を描き出す。興奮が静まるとヴァイオリン独奏が登場し、嫋々（じょうじょう）たる余韻を残して全曲が閉じられる。

楽器編成／フルート２（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ２（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、トライアングル、タンブリン、タムタム）、ハープ、弦五部

©読響

〈シェエラザード〉ソロ・ヴァイオリン

日下 紗矢子 *Sayako Kusaka*（読響コンサートマスター）

兵庫県出身。東京藝術大学、米・南メソディスト大学大学院、フライブルク音楽大学を経て2008年、ベルリン・コンツェルトハウス管の第1コンサートマスターに就任。13年4月からは読響のコンサートマスターも兼務している。日独両国での演奏活動に対し、両国の友好促進に大きな功績があったとして、15年2月に在ドイツ日本大使から「在外公館長表彰」を贈られた。日本音楽コンクール第1位、パガニーニ国際コンクール第2位。

ラヴェル 左手のためのピアノ協奏曲 ニ長調

作曲：1929～30年／初演：1932年1月5日、ウィーン／演奏時間：約19分

特異な委嘱から生まれた独創性あふれる傑作

ウィーン生まれのピアニスト、パウル・ヴィトゲンシュタインは第1次大戦に従軍して右手を失ったものの、左手のみで演奏できるレパートリーを開拓して舞台に復帰した。彼はリヒャルト・シュトラウス（1864～1949）やセルゲイ・プロコフィエフ（1891～1953）など、同時代の作曲家にも左手のための新作を多く委嘱しており、モーリス・ラヴェル（1875～1937）もその一人であった。依頼を受けた当時、ラヴェルは両手のためのピアノ協奏曲ト長調を作曲中であったが、その作業を中断して新作に取り組み、9か月ほどで完成させた。これが〈左手のためのピアノ協奏曲〉である。

同時期のト長調協奏曲が古典的な構成と曲想を示すのに対し、〈左手のための協奏曲〉は単一楽章構成でラプソディックな作品となった。音楽は大きく分けて三部形式からなる。第1部はゆったりしたテンポの中、管弦楽曲〈ラ・ヴァルス〉を思わせる低音域の動きに始まり、二つの主題が不安と緊張をはらみつつ絡み合って、徐々に高揚していく。ピアノ独奏はその高まりの頂点でようやく登場し、最初のカデンツァを奏でる。その後、叙情的なエピソードを経てあらわれる中間部は、行進曲風の力強い推進力と、ラヴェルが愛したジャズの語法が共存する中、モダンな色彩と響きを惜しげもなく披露して印象深い。やがて小太鼓のリズムとともに音楽が最高潮に達すると、曲の冒頭が高らかに回想されて第3部に突入する。すべての主題から素材を得たピアノのカデンツァの後、管弦楽が短く各主題を回想し、決然としたコーダが全曲を締めくくる。

なお、ヴィトゲンシュタインは作品の要求する高度な技巧を満たすことができず、初演にあたって楽譜を大きく改変して演奏したため、ラヴェルの不興を買った。ラヴェルはその後、1937年に新進気鋭のピアニスト、ジャック・フェヴリエを得てようやく、自らの意思を忠実に反映させた演奏を果たすことになる。

楽器編成／フルート３（ピッコロ持替）、オーボエ２、イングリッシュ・ホルン、クラリネット２、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット２、コントラファゴット、ホルン４、トランペット３、トロンボーン３、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル、小太鼓、タムタム、ウッドブロック）、ハープ、弦五部、独奏ピアノ

ラヴェル

バレエ音楽〈ダフニスとクロエ〉第2組曲

作曲：1909年6月～1912年4月5日／初演（バレエ全曲）：1912年6月8日、パリ／演奏時間：約18分

古代の牧歌的な物語を彩る代表作

ロシア出身の興行師セルゲイ・ディアギレフ率いるロシア・バレエ団が初めてのパリ公演を行ったのは、1909年5月から6月のことであった。公演自体は成功のうちに終わったとはいえ、舞台芸術としての質を向上させる努力が必要であると感じたディアギレフは、幾人かの作曲家にオリジナルのバレエ音楽を委嘱することを思いつく。その中の一人にモーリス・ラヴェルがいた。2世紀頃のギリシャの作家ロンゴスの著した物語『ダフニスとクロエ』を原作とする台本が委ねられ、彼はさっそく作曲にとりかかる。全曲が完成したのは1912年4月であり、初演は同年6月、ロシア・バレエ団の公演の一環として行われた。

物語は古代ギリシャのレスボス島で牧歌的な生活を送る少年ダフニスと少女クロエを主人公とし、海賊に誘拐されたクロエがパンの神によって救出され、無事にダフニスのもとに帰るまでを描く。ラヴェルは合唱を伴う大編成の管弦楽曲を作曲したうえで、50分を超える全曲から二つの組曲を抜粋し、合唱抜きで演奏するための楽譜も用意した。第2組曲は、原曲の第3部にあたる音楽から成る。

“夜明け”　森の中にあるニンフの祭壇の前、小川のせせらぎがこだまする中、夜明けを告げる鳥の歌が聞こえる。気を失ったダフニスを仲間の羊飼いが見つけて介抱していると、クロエが姿をあらわす。二人は固く抱擁する。

“パントマイム”　老いた羊飼いが、パンの神がクロエを救ったのは、かつて神が愛したニンフ、シランクスを思い出してのことであると告げる。ダフニスとクロエはパンとシランクスの物語を模して踊る――シランクスにつれなくされたパンが、葦をとって笛を作り、物憂げな歌を奏でると、シランクスはそれに合わせて踊り、やがてパンの腕に抱かれる。

“全員の踊り”　ニンフの祭壇の前で二人は祈る。娘たちが、続いて青年たちが登場し、熱狂的な踊りが始まる。最高潮のうちに幕が閉じる。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、アルトフルート、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、小太鼓、ミリタリードラム、トライアングル、タンブリン、カスタネット）、ハープ2、チェレスタ、ジュ・ドゥ・タンブル、弦五部